かささぎ通信 第146号

毎月第2金曜日 13：30〜15：30　　2025年　4月　11日　発行

刈谷市中央図書館研修室　参加自由　　森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

２０２５年３月の「森三郎の作品を読む会」では、「長靴を穿（は）いた太陽」（『雪こんこんお寺の柿の木』１９４３年１２月）を読みました。

「長靴を穿いた太陽」は『雪こんこんお寺の柿の木』全二十作の内、第十七番目の作品です。これまで読んできた作品（「かささぎ通信」第129号から145号参照）は古典的な時代を舞台とするものでした。今回の「長靴を穿いた太陽」以降の四作は現代ものの作品です。

この作品は天才音楽家の村山六十四郎というバイオリン弾きの話です。村山さんは座付きの楽団の一員で、いつもは劇場のオーケストラピットの第二バイオリンの隅っこの席で、第一バイオリンの奏でるワルツの節に合わせて「ブン・チャッチャッ」と退屈そうにバイオリンを弾いていました。その村山さんが天才ぶりを発揮するのは、公演がはねて劇場の掃除や片付けも終わった後の時間でした。そこにはもう一人、舞台では身動きもせず、歌も歌わずしゃべりもしなかった家来の槍持ち役の男性がいました。二人は誰もいない劇場で、一人は猛獣のようにものすごい低音（バス）で吠え、一人は台風のように、雷のようにバイオリンを奏で始めました。村山さんが奏でる音楽には人を牽きつける何かの力がこもっていました。槍持さんも舞台中を踊り回りました。見えない満員の観客の魂が大きな感動に溶け合いました。

ところが二人のバイオリンとバスに気付いた人たちがいました。次の芝居の相談をしていた劇場の支配人と作家と作曲家の三人です。新しい脚本は「長靴を穿いた太陽」というタイトルで、太陽一人が芝居の初めから終わりまで演じ、作曲の方も打楽器の伴奏に主席バイオリン一人に弾かせるという型破りなもので、役者とバイオリン奏者を探していたのです。新しい芝居は村山さんと槍持さんという適任を見つけ開幕しました。村山さんの奇妙なソロから始まった舞台は、泥んこの長靴を穿いた太陽の歌と踊りで進み、バイオリンの音にもますます珍妙な力が加わります。しかし、その時、バイオリンの一番大事な一の絃が切れ、隣のバイオリンと交換されます。絃の切れた村山さんのバイオリンは次々と送られて一番隅っこの人のところまでいきます。この時、村山さんはいつもの自分の立場を思い起こしたのでしょうか、急に不思議な力を失ってしまったのです。新しい風変わりな歌劇を称賛していた観客たちも大騒ぎになり、幕が下ろされます。次からはまた元の歌劇が演じられ、村山さんも元の第二バイオリンの席で「ブン・チャッチャッ」と音を出しています。

当日の会では、特に後段部分の作者の意図の分かりにくさが話題になりました。村山さんの才能が見いだされ、真に迫る不思議な音楽が聴く人を魅了した前段までは、話はよく分かりました。後段に入って、夜中の村山さんと槍持さんとの舞台はただのちぐはぐな音楽になっていたことも想像がつきます。しかし再び元の第二バイオリンの席で伴奏を弾く村山さんの目が以前とは違い「生き生きと輝いて」いたのはなぜでしょうか。オーケストラの中の第二バイオリンの位置付けに村山さんが気づいたというのでしょうか。作者は「総合芸術」という言葉を使っていますが、それは皮肉のように受け取れます。「長靴を穿いた太陽」の若い作家と作曲家は自分の才能の無さを悲観した末路を取りますが、作家の遺書には「度をはづれた凡くらは、天才と間違へられることがある」と書かれています。作者は芸術における「天才」について書こうとしたのでしょうか。この話の構成は、狂言回しが聞き手に、この話全体を俯瞰するように語る形式になっています。最後は狂言回しの話を聞いていた人々が顔をしかめて出て行くところで終わっています。でも作者自身が世間の理解とはそんなものだとあきらめているようにも取れます。作者の思いを想像し理解するには、もう少し読み返さないといけないと思った作品でした。

〈次回予定〉２０２５年５月９日（金）午後一時半〜三時半
「鈴」（『赤い鳥』１９３４．１）
「洋服屋のお松さん」（『雪こんこんお寺の柿の木』１９４３．１２）